

## 最優秀賞受賞にあたって

熊本市立日吉東小学校

た やま まさ ひろ  
田山 雅博



このたびは名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。そして、このような素晴らしい表彰の場を設けていただきお礼を申し上げます。

今回の実践は平成29年度の実践です。平成29年4月は、ちょうど熊本地震から1年が経過したときでした。そのとき私は6年生の子どもたちを担任したのですが、子どもたちは、復興が半ばであることは勿論知っていますし、本校が避難所となっていたことも記憶に新しいにもかかわらず、熊本地震のことが話題になることはなく、記憶の風化が感じられました。

そういった状況下で、熊本地震について主体的な学びをどのように構築していったらよいかと考えているときに、熊本日日新聞のある記事と出会いました。熊本県立大学の大島准教授が、明治22年に起きた熊本地震の際、民衆が災害を伝え記憶する方法として数え歌が用いられていた事実が発見されたという報道でした。この記事と出会った瞬間、私は「これだ」と思いました。この事実を子どもたちにおつけ、どのような反応をするだろうかとわくわくして授業に臨みました。

反応は予想をはるかに超えるもので、熊日の新聞記者さんや大島准教授、また、地域の方々の大きな協力を得ながら数え歌を作り、平成の熊本地震のことを伝えていこうという児童の思いがどんどん膨らんでいったことを、つい昨日のこのように思い出します。

今回この受賞にあたり、私は自分の教員人生を振り返りました。働き方改革が声高に叫ばれている中で、諸先輩方が自分の時間を削り「子どもたちのために」と時間をかけて実践されてきたことは、なかなか難しくなっているところもあると思いますが、子どもたちのために、教育の質は落とせません。今日ご参会の先生方も、全国の先生方も、そのジレンマに悩まれているところだと思います。その解決のため、現場の私たちは何ができるのかと考えたときに、「ちょっとだけ」というキーワードが浮かびました。「ちょっとだけ」というものを、「継続」と「出会い」と「まとめ」という三つに落とし込んでやっていくべきなのではないでしょうか。ちょっとだけ「継続」をしていると、「出会い」がちょっとだけ充実します。その「継続」と「出会い」を大切にしたい実践や学びを、ちょっとだけ「まとめ」ていく姿勢をもっていると、それが経験となり、財産となっていくのではと思うのです。

最後に、これまでいろいろと学ばせていただいた先輩の先生方、ご縁あって担任させていただいた子どもたちとその保護者の皆様、地域の方々、そしていつも支えてくれている妻と子どもにも感謝を忘れず、継続と出会いとまとめの中で、ちょっとだけ培ってきた力を、いろいろな実践をするにあたって、ちょっとだけ出していくという、そういった愚直な実践を続けられる教員でありたいと思っています。

本日はありがとうございました。